

在宅医療カレッジ

地域共生社会を支える多職種の
学び21講

佐々木淳＝編

本体2000円＋税

医学書院 ☎03-3817-5600

在宅医療カレッジ

地域共生社会を支える多職種の学び21講

佐々木 淳 著



ケアする人を支えるのは

学びの場だ

わが業務に追われ、学びのための研修へ向かうことが困難なスタッフも多いだろう。

『在宅医療カレッジ』はそんなジレンマに
応えてくれる、まさに「24時間365日、本
書はあなたのために開演します」と謳われた
書籍である。実際、私は深夜や細切れの時間
に読み進めることができた。

本書は、2015年から公開されている講
演会のダイジェスト版である。テーマとして
認知症ケア、高齢者ケア、そして地域共生社

ではとても務まらないし、その
方の最期の瞬間まで多岐にわ
たって出現するニーズに応える
各職種の存在と、それぞれのた
ゆみな知識の向上とスキル
アップが不可欠である。ただ、
現場では「24時間365日対応」
が核であり、医療サービスを提
供し続けるうえでの最大の障壁
でもあるが、どうしても昼夜間

多職種協働は他職種理解から

在宅医療に関わるわれわれは、人が最期ま
で自分らしく、安心して地域で暮らせる社会
を多職種で支えることをめざしている。1人

学び続けたい現場人に格好の教材

高砂訪問看護ステーション看護師 吉本薫子

会の川部に分かれて構成されている。多職種
協働の重要性は周知の通りであるが、他職種
の役割の相互理解にはまだ課題が多い。永
井康徳医師が職種問わず全新人職員に必ず問
いかけられる「患者さんが満足した在宅医療
を行なうのに、最も必要とされる在宅サビー
スは何ですか？」という言葉（157頁）に、
自らの経験を思い出した。独居で重度認知症
が終末期で身寄りなしという利用者の訪問
看護に関わった際、ケアマネジャーや訪問介
護のスタッフと日々議論して試行錯誤しながら
それぞれの役割を果たし、利用者の望まれ
る在宅看取りにつながれたことがあった。
誰が欠けても実現できなかった。

その人らしい生活を支えるには、自分たち
の職種が行なっているサービスだけでは「無
力」であるという思いを皆が持つことが、連
携の一步なのだろう。他職種がどのような専
門性でどのような役割を担うのか、互いが理
解し合い、サービスの目的と課題を共有する
ために、多職種が合同で学びを深める本書が
呈示するような場が、現代に求められている
のだと思う。

コンパクトな構成で読みやすく
ステーション内のスタッフ教材に向く

また本書では、認知症の当事者をはじめ、
各分野の現場を知り尽くす第一線の専門家か
らのメッセージが、私たちが共有すべき知識
とその土台づくりのためのヒントを与えてく
れる。各回が7〜8頁とコンパクトにまとめ
られているため短時間で読みやすく、読者が
現場で実際に抱えている悩みや疑問に関連す
る項目から先に読み進めやすい。スタッフの
研修参加が消極的で悩んでいるというステ
ーションであれば、内部での事例検討会の谷間
のタイミングに共有できる教材として利用
し、学びのきっかけを提供することもできる
のではないだろうか。訪問看護師である私に
とって超高齢社会で確実に増加している認知
症に対するケアは大きな関心事であり、加藤
忠相氏のデイサービスでの支援（13頁）、藤
原瑠美氏のスウェーデンでのオムソリケア
（23頁）が、それぞれ大きな学びとなった。
効果的な自立支援サービスを提供している現
場では、スタッフが生き生きと誇りを持って
働いている。人間の尊厳を中心に据えたケア
というのは、働くスタッフの尊厳も同時に
守っているのだと実感した。

最後に、書籍の魅力には装丁も重要だと日
頃から思っている。本書を手にとったとき、
幡野広志氏撮影の表紙写真の力強さに強く惹
かれた。被写体となった編者とカレッジ参加
者の向学の想いが表われているのだろう。